様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２１４８

研究課題名（和文）書物の中の視覚の泉－18世紀フランス絵画におけるオランダ挿絵本の受容研究

研究課題名（英文）Iconographic Study on French painting of 18th century and Illustration Books

研究代表者
安室　可奈子（坂本）（AZUCHI, Kanako）

日本大学・芸術学部・研究員

研究者番号：１０４１９７４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：三年間の研究期間において、研究代表者は具体的に以下の三点の絵画作品について個別研究を行った。２７年度はジェラール《アンリ四世のパリ入城》（1817年）、２８年度はブーシェ《ディアナの水浴》（1742年）、２９年度はヴァトー《ニンフとサテュロス》（1716－17年）について研究を進め、うちジェラールとブーシェ作品については大学紀要論文での成果発表を行った。本研究を通じ、挿絵と絵画が近世フランスの図像展開において密接に結びついていることが明らかになった。ヴァトー作品については、日仏美術学会での報告を３０年７月に行い、研究成果の一部を口頭発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究課題は、18世紀のフランスにおいて数多く取り上げられたギリシャ・ローマ神話を主題とする絵画について、同時代に刊行された挿絵本からの視覚的影響という視点から分析するものである。フランス・アカデミーの画家たちは、文学的な記述のみならず、そこに付されていた挿絵を参照しながら、自らの作品を構想し、油彩画へと発展させた。特に「ディアナ」と「アンティオペ」といったオウィディウス神話の図像に着目し、調査、研究を進めた。画家たちが参照していた挿絵本を詳しく分析し、絵画作品の構想過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：From April 2015 to March 2018, Azuchi conducted specific researches on the following three paintings. In 2015, Francois Gerard's "The Entry of Henri the forth to Paris " and in 2016, Francois Boucher's "The Bathing of Diana" (1742) , in 2017, Watteau's " Nymph and Satyr " (1716-17).
In each research, Azuchi dealt with the relationship between illustration and painting. About Gerard's and Boucher's works, I published achievements at the University bulletins. Regarding Watteau's work, I did an oral presentation in July 2018 at the French-Japanese Society of Art and Archeology.

研究分野：French art history

キーワード：フランス　18世紀　絵画　挿絵本

１．研究開始当初の背景

18 世紀フランスのいわゆるロココ絵画の主題や様式において、ルーベンス以降のフランドル・オランダ絵画の要素が多分にみとめられることは、数多くの作品研究の中で指摘されてきた。17 世紀末にアカデミーで起こったプッサン派対ルーベンス派の大論争の中で、ロジェ・ド・ピルを論客に後者が勝利し新しい様式への転換を促したことはよく知られている。研究代表者は、他国に比べて半世紀も遅れたこの時期、フランスにルーベンスの影響が到達したひとつの背景として、オランダ発の挿絵本が視覚的源泉となった可能性が濃厚であると考えている。それらの挿絵の多くは、ルーベンスやその周辺の絵画および現地の画家たちの原画に基づく複製銅版画であった。本研究ではこうした出版史的背景を踏まえ、フランス・アカデミーの周辺で生み出された神話画とオランダ発挿絵本の視覚的接点を実証的に探る。

２．研究の目的

本研究は 18 世紀フランスの神話画の特性を、オランダ発の挿絵本出版史と関連づけることによって、新たな視座から再検証すること、またこの研究を通じて近世フランスにおける版画と絵画の関係について総合的に明らかにすることを目的としている。18 世紀前半のフランス語書物の多くは、政治的・経済的事情からオランダ諸都市で出版され本国に輸入されていた。当時ヴァトーやブーシェらフランス人画家たちが参照した神話本の挿絵には、ルーベンス以降の北方絵画の伝統的要素が色濃くみとめられ、絵画の構想過程で視覚的着想源となったことがわかる。こうした事情を踏まえ、具体的には① オランダにおける挿絵本出版の実態 、②サロン（官展）に出品された歴史画・神話画における北方絵画の図像伝統、③挿絵本制作に携わった画家および版画家たち、④フランスにおける版画・挿絵本流通の状況の４つのテーマについて考察する。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、次の３つのステップに沿って研究を進めた。①日、仏、英、蘭、露の各国において、画家、絵画作品、挿絵本、版画家に関する資料蒐集、 ②入手した資料群の整理と分析、データベース化、③以上の基礎研究を応用させ、近世フランス絵画と挿絵の関係について総括的に考察。

具体的には、平成２７年度は、それまで研究を継続してきたジェラール《アンリ４世のパリ入城》の成立背景について、特に同時代の版画における視覚的影響を美術史学会で口頭発表、紀要論文にて研究成果を刊行した。平成２８年度はブーシェ《ユピテルとカリスト》と同時代のオウィディウス挿絵本に関わる資料蒐集・調査と紀要論文における成果発表。平成２９年度はヴァトー《ニンフとサテュロス》と同時代の挿絵本について資料蒐集・調査。その研究成果については、本年（平成 30 年）7 月に日仏美術学会で口頭発表を予定し、当該年度中に紀要論文を刊行する予定である。

４．研究成果

（１）安室可奈子・論文「フランス王政復古期の歴史図像―ルイ１８世のパリ入城とアンリ４世騎馬像」

王政復古期にブルボン王朝の継承性をアピールするため、その始祖であるアンリ 4 世の図像が流行したことは、よく知られた事実である。フランソワ・ジェラールは国王ルイ 18 世より注文を受け《アンリ４世のパリ入城》を描いた。本作品については、すでに 1975 年カウフマンが論文にて「1817 年当時の立憲君主制の表象である」と指摘している。

本研究ではこのカウフマンの見解を踏襲しつつ、そこでは触れられなかった図像がジェラール作品の成立過程に影響を及ぼしている可能性について論じた。それは 1814 年 5 月、パリに帰還したルイ 18 世が入市パレードを行った際の情景を描いた絵画および版画作品である。これらの作例において、王は群衆に見守られながら馬車でポン・ヌフ橋を行進するが、そこではアンリ 4 世騎馬像の前を通過する様子が王政復古の象徴として描かれた。フランス国立図書館版画室のヴァンク・コレクションには、この主題を取り上げた彩色の歴史版画が多数認められる。

このポン・ヌフ橋のアンリ 4 世騎馬像は、元々は 17 世紀にマリー・ド・メディシスの命により建立されたものである。しかしフランス革命後、戦争のため取り壊されていた。そこでルイ 18 世のパリ入市に間に合わせるために、急ごしらえで石膏像を制作し設置した。本研究の後半では、初期資料と歴史版画を傍証として、その石膏像とパレード後まもなく制作が着手された完成作のブロンズ像について述べた。ジェラールによる《アンリ 4 世のパリ入城》は、まさにこうした特殊な政治的背景の中で生まれた絵画であり、ルイ 18 世と復古王政によるアンリ 4 世の視覚イメージ戦略の集大成であったと考えられるのである。

（２）安室可奈子・論文「フランソワ・ブーシェ《ディアナの水浴》（1742 年）の文学的・視覚的着想源をめぐって」

ブーシェ《ディアナの水浴》（1742 年）は、オウィディウス『変身物語』が文学上の典拠とされつつも、その物語的要素については先行研究でほとんど触れられてこなかった。本研究は、このブーシェ作品の成立背景を、絵画・挿絵版画におけるディアナの図像伝統に位置付けて論じるものである。

水浴するディアナの情景は、当初、ティツィアーノの 2 点の絵画に見出されるように、「ディアナとカリスト」「ディアナとアクタイオン」という『変身物語』の２つの物語主題が下敷きとなって描かれていた。17 世紀初めに、

ルーベンスとその周辺の画家たちが、ここからナラティブな要素を排除して、狩りの前後に休息・沐浴するディアナとニンフたちの場面を数多く描いた。18 世紀フランスにおけるブーシェ以前のアカデミー画家たちの《ディアナの水浴》も、こうした北方の図像伝統に位置づけられるといえよう。しかしながら、同時代の先行作例がディアナと彼女を取り巻くニンフたちの群像という画面構成なのに対して、ブーシェ作品ではニンフはひとりしか描かれておらず、女神とニンフの関係は大変親密に見える。

安室は、この特異性について、アムステルダムで刊行された 1732 年版『変身物語』挿絵本における「ユピテルとカリスト」の挿絵が、画家に視覚的影響を与えた可能性について指摘した。「ユピテルとカリスト」は、ディアナに寵愛されていたカリストが狩の後に森でひとり休息していた際、ユピテルに見初められるエピソードである。ユピテルはこのニンフの警戒心を解くため、ディアナの姿に身をやつして彼女に近づく。つまり「ユピテルとカリスト」は、主題は異なるが、狩の後にディアナとひとりのニンフが休息をする情景として、「ディアナの水浴」との類似性が認められるのである。

1732 年版の挿絵本では、この物語の挿絵をオランダ人画家ウィトが担当している。ブーシェ作品と比較すると、ディアナとニンフの親密性、傍らに描きこまれた狩の獲物のうさぎ 1 匹と野禽 2 羽という組み合わせ、2 頭の猟犬の身ぶりなど、共通点が非常に多い。ブーシェ自身がこの挿絵本の別の挿絵制作に携わっていたという情報もあり、このウィトの挿絵を参照した可能性は大いに考えられる。

以上のように本研究では、ブーシェ作品の個別研究を通じて、18 世紀のフランス絵画に影響を及ぼしたルーベンスらを本源とする北方の図像伝統が、オランダで刊行された挿絵本というメディアによっても流通、頒布した実態を明らかにした。

（3）安室可奈子・論文「西欧における狩猟文化とディアナの図像伝統-ブーシェ作品をめぐる一考察」

ディアナ図像研究の過程で、15 世紀以降近世までの西洋絵画における狩りの図像がどのように描かれてきたのか、その伝統と展開について考察した。まず最初に貴族文化としての狩猟図像の展開について述べ、フェビュス『狩猟の書』など書物の挿絵やウッチェロ《夜の狩猟》等、絵画作品における純粋な狩猟の情景を取り上げた。ルネサンス期以降、こうした狩猟図像の中から、ピサネッロ《聖エウスタキウスの幻視》等に顕著なように、狩りの獲物が物語主題の絵画の一部として組み込まれていく。こうした流れの中で、パルミジャニーノやクルーエの作例に見られるように、ディアナ図像の中にも狩猟のモチーフが描きこまれるようになった。17 世紀になるとルーベンスと周辺の画家たちが、ディアナのアトリビュートとして、狩りの獲物（ジビエ）を頻繁に組み込むようになる。ブーシェを初めとする 18 世紀フランス・アカデミーのディアナ図像は、このような系譜の中から生まれたことを指摘した。

（4）安室可奈子・論文「ユピテルとカリスト図像の系譜」

ブーシェ《ディアナの水浴》と密接な関わりのあるユピテルとカリスト主題が、特に 17、18 世紀において頻繁に描かれたことを指摘し、類型別に図像の展開について分析した。17 世紀にはルーベンスやチェルヴェッリらの作例に見られるように、ディアナに変身しているはずのユピテルは非常に男性的に描かれ、またカリストがほぼ横たわった身ぶりで描かれている（第一類型）。18 世紀になると、ウィトやトロワ、アミゴーニの作例に見られるように、ユピテルは完全に女性的なディアナの姿で描かれ、カリストは半身を起こして岩のような所に座っている（第二類型）。ブーシェ作品は第二類型に位置付けられる。

また 17、18 世紀のオウィディウス挿絵本について、同主題がどのように版画化されてきたのか、その特質を述べた。1622 年パリ版の『変身物語』挿絵では第一類型の「ユピテルとカリスト」が描かれ、1637 年パリ版では、第二類型が採用されている。そしてブーシェ作品に視覚的影響を与えたと思われる 1732 年アムステルダム版の挿絵は、ここでは第一類型のより親密な男女の身振りと、第二類型の三角形構図を融合させていることがわかる。

ブーシェ自身も《ディアナの水浴》の 2 年後に《ユピテルとカリスト》（1744 年、プーシキン美術館）を描いているが、やはり第一類型と第二類型を融合させた人物表現となっている。このことからも、ブーシェが制作の際に先行していたウィトの絵画、挿絵作品を参照していた可能性が極めて高いことを指摘した。

（5）安室可奈子・口頭発表「ヴァトー《ニンフとサテュロス（ユピテルとアンティオペ）》とオウィディウス挿絵本」

研究最終年度に調査を進めていたヴァトー作品と挿絵についての研究成果の一部を、日仏美術学会例会で口頭発表した。

アントワーヌ・ヴァトー作《ニンフとサテュロス》（1715–1717 年頃、ルーヴル美術館）は、別名《ユピテルとアンティオペ》としても知られた画家の数少ない神話主題の絵画のひとつである。フランドルのアーレンベルク公によって注文され、扉口上部装飾の対画の一点として描かれた。19 世紀半ばの売り立て目録で再び言及されるまで、本作品が 18 世紀にどのような来歴を辿ったかは、よくわかっていない。

作品をめぐる主題については、長らく議論が続いてきた。ハイネケンはケイリュスの複

製版画目録（1778-90 年）において、本作品の主題を《ウェヌスとサテュロス》と記述している。1868 年に作品を購入したラ・カーズはこれを《ユピテルとアンティオペ》とし、翌年の収集家の死去にともないルーヴル美術館に寄贈された。ブリエールのルーヴル所蔵目録（1927 年）では、《ユピテルとアンティオペ、あるいはニンフとサテュロス》とされ、1984 年の大規模回顧展図録においてローザンベールが《ニンフとサテュロス、別称ユピテルとアンティオペ》として以降、現在これがルーヴルの公式見解となっている。

「ユピテルとアンティオペ」という主題に少なくない疑義が生じた根拠は、重要なアトリビュートとしてのユピテルの「鷲」が描かれていないことであった。しかしながら 1991 年『神々の愛』展におけるベイリーの作品解説では、再び《ユピテルとアンティオペ》を正題とする解釈が提示された。ベイリーは、ヴァトーの視覚的着想源として、ティツィアーノの《パルドのウェヌス》やコレッジョおよびヴァン・ダイクの《ユピテルとアンティオペ》等をあげ、画家の構想過程に同主題の作例が影響していることを指摘したのである。

本口頭発表では以上のような先行研究の流れを踏まえ、1702 年にアムステルダムで刊行されたオウィディウス『変身物語』の挿絵を、ヴァトーが参照し得た先行作例として指摘した。1702 年版オウィディウス挿絵本は、ラテン語の原文に、アカデミー・フランセーズのデュ・リュイエによる仏訳がつけられた大型の豪華本で、フランス国内にも広く流通していた。ヴァトーの作品とこうした挿絵本出版史的状況を関連付けつつ、本作品の成立過程の一端について報告した。

なお、本報告の内容については 2019 年度中に学会または大学紀要に投稿予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①<u>安室　可奈子</u>「ユピテルとカリスト図像の系譜」、『日本大学研究員研究報告書』、第 17 号、2018 年 7 月、pp.43-47（査読有）.

②<u>安室　可奈子</u>「西欧における狩猟文化とディアナの図像伝統-ブーシェ作品をめぐる一考察」、『日本大学研究員研究報告書』、第 16 号、2017 年 7 月、pp.41-47（査読有）.

③<u>安室　可奈子</u>　「フランソワ・ブーシェ《ディアナの水浴》（1742 年）の文学的・視覚的着想源をめぐって」、『言語・文学研究論集』、第 17 号、2017 年 3 月、pp.1-15（査読有）.

④<u>安室　可奈子</u>「フランス王政復古期の歴史図像―ルイ１８世のパリ入城とアンリ４世騎馬像」、『言語・文学研究論集』、第 16 号、2016 年 3 月、pp.23-38（査読有）.

〔学会発表〕（計 2 件）

①<u>安室　可奈子</u>
「フランス王政復古期の歴史図像：ルイ１８世のパリ入城とアンリ４世騎馬像」美術史学会東支部例会、2015 年 11 月 28 日、東京、慶應義塾大学

②<u>安室　可奈子</u>
「ヴァトー《ニンフとサテュロス（ユピテルとアンティオペ）》とオウィディウス挿絵本」日仏美術学会例会、2018 年 7 月 14 日、京都大学

６．研究組織

(1)研究代表者

安室　可奈子（AZUCHI Kanako）
日本大学・芸術学部・研究員
研究者番号：１０４１９７４９